

■工藤忠 (満州国最後の皇帝溥儀)ラストエンペラーの忠臣。

くどうちゆう

新体詩抄・・・1882＝ 青森県小幡村(板柳町)で、代々庄屋の工藤家当主椋次郎の三男に生まれる。母は後妻ふじ。名は鉄三郎。

身体が大ききく、“鬼鉄”などのあだ名がつくほど喧嘩もして、父から本格的な折檻を受けながら育ち、

初の対等条約1888＝ 6歳：小幡小学校に入学。

帝国憲法発布1889＝ 7歳：

足尾鉍毒始・・・1891＝ 9歳：

大本教・・・1892＝10歳：卒業し、できたばかりの板柳尋常高等小学校の高等科に進み、校長工藤大成の薫陶を受け、

日清戦争始・・・1894＝12歳：中退して、東奥義塾に入学、町道場(北辰堂)にも通い、

のちに著名な剣道家となる同期の市川宇門に教えるほど剣道にも上達、後年義塾出身の優れた軍人を多く知るようになるに徒い、誇りを抱くようになる。

子規句歌革新1898＝16歳：塾生の美少年に惚れこんで落第、1年留年した後、

Bushidou・・・1899＝17歳：首席となって中退、上京して、錦城中学4年に編入学。

ピアノ国産化・・・1900＝18歳：開設された青森県出身者のための寄宿舎(修養社)に入り、陸羯南から強い影響を受け、孫文の革命運動に参加した義塾の先輩山田良政が清軍に捕まり処刑されて衝撃。旧会津藩士の大陸浪人中野天門を師に。

田中正造直訴1901＝19歳：突然上京してきた市川を同宿させ二人で剣道に励む。東京学園受験科4年に編入学、

教科書疑獄・・・1902＝20歳：高等学校受験に失敗し、順天中学5年に編入学、エリートコースから外れたことがトラウマに。

日比谷公園・・・1903＝21歳：夏休みに朝鮮から北京まで旅行、初めて大陸を体験し、軍部が組織した探偵グループの横川省三、神禎介らに会い、行動をともしよとしたが、重い脚氣を患い日本に送還される。

日露戦争始・・・1904＝22歳：卒業し、専修学校に入学。

日露戦争終・・・1905＝23歳：陸羯南が苦々しくみていた日比谷焼打事件の群衆の一人となって、専修学校も中退し帰郷、

満鉄発足・・・1906＝24歳：今度は北海道からサハリンに渡り、

韓国反日暴動1907＝25歳：この年、市川が全国剣道大会青年の部で優勝。陸羯南が死去。サハリン北部のロシア領に入る。

7777創刊・・・1908＝26歳：間宮海峡を徒歩で横断、密入国者として投獄されるが、ニコライエフスクでデパートを運営していた島田元太郎に救われ、そのもて働いた後、支援も受けて、ハルビン・大連へ。さらに上海へ向かい、

伊藤博文暗殺1909＝27歳：様々な仕事をするうち安南(ベトナム)独立運動家と出会い共鳴するが、資金不足で断念。以後、風船売りをしながら中国各地を旅行、中国語を身につけ、中国人の生活を知って、帰国し、帰郷。

明治天皇没・・・1912＝30歳：中国第二革命の噂に、支援しようと南京に行き、さらに日本陸軍工作に乗って漢口の(白狼軍)に入るも、

第一次大戦始1914＝32歳：*日本人と判明して危険となり、日本領事館からの命令で帰国するが、秘密結社(白狼軍)の内情を知った人物として一躍注目され、講演会も開催、孫文や黄興とも会うが連携を断念。日本で冷遇されていた甘陝総督升允に会って心服し、一瞬にして復辟派に転じ、その使命を担って第1回甘肅旅行、以後、升允を支え続け、復辟派の活動家として日中間に広く知られるようになって行く。

21ヶ条要求・・・1915＝33歳：帰国。おそらく小川平吉の配慮で大陸浪人関係者の娘タイと結婚、その実家千葉県成田が居宅となるが、

民本主義・・・1916＝34歳：すぐに上海に向かい、陸軍に革命派の動向を報告、山東第三革命では一万の軍を率いて活動するが、

ロシア革命・・・1917＝35歳：袁世凱の死で解散となるや、復辟派に戻り、*升允の密命帯びて北京に赴き、溥儀と運命的に出会えるも、復辟失敗で帰国。田中義一の支援を取り付け、覚悟を決めた升允とともに、第2回甘肅旅行するが、

本格政党内閣1918＝36歳：結局失敗し、北京で再び溥儀に謁見後、帰国。黒龍会機関誌に初の論文「西部支那事情」を公表し、満川亀太郎が組織した(老社会)に参加、以後、思想的にも鍛えられて行く。

ハルビン条約・・・1919＝37歳：ロシアの反革命軍代表セシヨノフの要請で、升允と長春に行き、さらに一人でハルビンに行き、モンゴル＝ブリアート連合を画策するも夢に終わる。。

大暴落・・・1920＝38歳：陸相田中義一推挙で、外務省と東亜同文会から派遣され第3回甘肅旅行に出、まもなく、大地震に遭遇、

原敬首相暗殺1921＝39歳：青海を探検、

水平社結成・・・1922＝40歳：寧夏で(日中合弁企業)洋行を立ち上げるなどして、

護憲三派圧勝1924＝42歳：この年、ついに清国は廢帝となり、溥儀は紫禁城から追放される。4年ぶりに甘肅旅行から帰国。

治安維持法・・・1925＝43歳：この年、溥儀が隠密に天津の日本租界に入る。日中合弁の絨毯会社設立を構想するも欧米の妨害で失敗、

日本時代始・・・1926＝44歳：北京で本庄繁を訪問。この間、溥儀の希望でその訪日を画策。

金融恐慌・・・1927＝45歳：

共産党事件・・・1928＝46歳：奉天に赴いた後、帰国し、張作霖爆殺事件の内実を小川平吉鉄相・田中義一首相に説明、衝撃を与え、

世界恐慌・・・1929＝47歳：内閣総辞職、田中死去に至る。中国各地を回り、信仰していた御木徳一のひのみち教団の建物借用し、

海軍軍縮条約1930＝48歳：満川亀太郎と(興亜学塾)を設立して、総務部長になるとともに、支那語・支那事情を講義するが、

満州事変・・・1931＝49歳：升允の死去直後に満州事変が起こり、現地へ向かうと、奉天特務機関士肥原賢二から溥儀の天津脱出を依頼されて天津に行き、反対論うずまくなか説得して密かに連れ出し、旅順のヤマトホテルに入ると、そこに川島芳子が天津から溥儀の妻婉容を連れて来、その護衛も務める。利権求めて日本人が殺到するなか、

五一五事件・・・1932＝50歳：*満州国が建国され、溥儀の執政就任、その侍従武官となるが、軍人でないことに軍部が強く反対、溥儀が“忠”の名を与え、山岡鉄舟の例など出して一段落後、満州国の留学生を連れて帰国。

国際連盟脱退1933＝51歳：溥儀の軍部への配慮で、武官職を辞め、事実上の侍衛処長となり、帝政実現のための活動。

帝人疑獄事件1934＝52歳：溥儀の皇帝就任とともに、正式に侍衛官長になり、家族で満州国に移住。

芥川直木賞始1935＝53歳：溥儀の初訪日に際して、戸籍上も“忠”に改名し、随行。皇族はじめ政府・軍部の要人にあまねく知られ、

溥儀と近衛文麿の極秘会談も仲介。郷里板柳からも大挙して上京、溥儀の配慮で一瞬の暇得て会見。

二二六事件・・・1936＝54歳：この年、第二次ひのみち事件が発生、

日中戦争始・・・1937＝55歳：満州国官内府の官制改革で独立官署となった侍衛処長、

健保+総動員・・・1938＝56歳：この年、御木徳一が弾圧のなか死去。

第二次大戦始1939＝57歳：甘肅工作案提出。“ひのみち不敬事件”の新京出張公判で証言。

大政翼賛会・・・1940＝58歳：*溥儀の二回目の訪日にも随行するなど、溥儀にとってなくてはならない存在だったが、官内府の停年制により、侍衛処長を退任せざるを得なくなる。

日米開戦・・・1941＝59歳：官内府顧問官に任命後、家族を連れて帰国し、故郷板柳を訪問して大歓迎。直後に日米開戦になると、

・・・1942＝60歳：中国との和議のための「建白書」を作成し、頭山満筆頭に錚々たる人たちの署名を得て、東條内閣に提出。溥儀を北京に移すことを画策し、日本・満洲を往復。

創価学会検挙1943＝61歳：溥儀に会い、帰国して満洲に戻れないうちに敗戦となり、溥儀の身を案じて近衛文麿を訪問するも、満州帝国は解体され、溥儀はソ連に抑留される。

敗戦・・・1945＝63歳：溥儀が、極東裁判で検察側証人として出廷し、被告人たちに不利な証言をするのを傍聴するが、忠誠心は変わらず、翌日、(毎日新聞)に記事掲載。

新憲法公布・・・1946＝64歳：以後、御木徳一の子で戦後PL教団設立した徳一やブリヂストン創業者石橋正二郎の支援を受けながら、

独立回復・・・1951＝69歳：

メア-事件・・・1952＝70歳：溥儀弁護の強い思いから「皇帝溥儀～私は日本を裏切ったか」刊行。

TV放送始・・・1953＝71歳：妻が死去。

自衛隊発足・・・1954＝72歳：

美智子妃・・・1959＝77歳：この前後、前半生の記録「手記」を執筆、

安保闘争・・・1960＝78歳：

TV宇宙中継始1963＝81歳：

大学紛争始・・・1965＝83歳：青森放送のラジオ番組に回顧談を録音し、台湾で国民党要人に会った後、成田で、_没した。

山田勝男「溥儀の忠臣工藤忠」、